

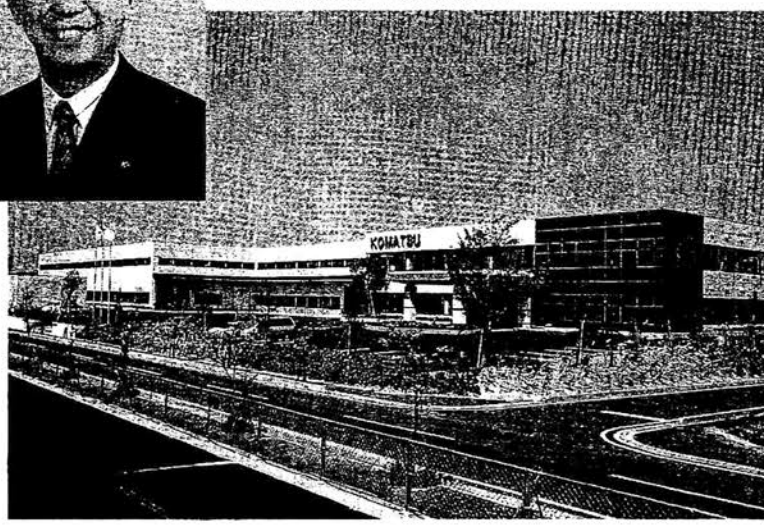
島根県松江市／小松電機産業株式会社

## 「一村一志運動」を提唱して社会貢献 社会・環境問題を解決する事業構想

センサーで感知して高速で開閉するシートシャッター「門番」や  
上下水道自動制御・監視システム「やくも水神」の開発で  
全国に新しいマーケットを創造してきた小松昭夫社長は、  
反骨心でユニークな発想を必ず実践してきた。  
同族会社化を嫌い、今、出雲の地から世界に向け、その理念を発信する。



経営理念がよく表れた、北に宍道湖を望む新社屋と、小松昭夫社長



入社当時、資本金がわずかに一億円だった佐藤造機は、小松氏が退職するまでの八年間で二十一億円になるまでに急成長した。ところが、地元でライバルが存在しないためか、やがて時代のニーズと掛け離れていった結果、経営が破綻、七一年に会社更生法の適用を受けることになってしまった。

それを機に小松氏は佐藤造機を退社。自分で事業を起こすことを決意して、商売の本場大阪に出ていった。

だが、小松氏は研究所において設計以外のことは何も知らない。まずは自分の身につけた技術を生かそうと

### 「おもしろ、おかしく……」

小松電機産業の社員の出す名刺には、主力商品のシートシャッター「門番」や集落排水計測・制御・監視システム「やくも水神」の派手な文字と写真が印刷されている。裏返すと、社是と経営理念が書かれている。社是は「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」。経営理念が「おもしろ、おかしく、楽しく、ゆかいに」である。堂々と立派な社是や経営理念を掲げても、ただの標語に終わってはいけず、広報戦略がうまく、よくある日本企業と変わりが無い。小松昭夫社長のユニークなところは、それを必ず実践に結びつけていくことだろう。そのため、自ら率先して世襲制を廃止。「自分の子ども、従兄弟は会社に入れない」ことを宣言。それも、決意が揺るがないように、国道端に大きな看板を建てて、社是を世間に公表した。そうしておけば、いろんな人の目に触れるため、ヘタなことをすると「小松は看板に偽りあり」ということになる。看板は、そんなことにならないための歯止めであり戒めというわけだ。経営理念のほうは、例えば昨年五月、北に宍道湖を望む松江湖南テクノパークに完成した新社屋（研究棟・工場）を見れば、よくわ

### 「大阪でルンペン生活を」

小松社長は島根県の高額納税者番号付のベスト九に顔を出す、いわば日本を代表するベンチャー企業経営者の一人であるが、もともとは「自分で事業を起こすことなど考えていなかった」という。一九四四年四月、創業の地である島根県八束郡八雲村で生まれた小松社長は、六三年に県立松江工業高校機械科を卒業。エンジニアを目指して、地元の上場企業・佐藤造機（現・三菱農機）に就職、中央研究所で農業機械の設計・開発に従事した。

して、知人の紹介で設計事務所に就職した。しかしここは長続きせず、結局、新しい仕事のタネを探しに大阪、名古屋の見本市などを見て歩いた。パチンコや設計のアルバイトで食いつないだというその時代は、小松社長に言わせれば「大阪で二年間、ルンペンをやっていた」ということになる。

やがて、営業を勉強するために職業安定所で紹介された小さな機械商社に就職。その会社の社長が、下水の水中ポンプを初めて国産化したメーカー出身の技術者だった。当時は大型の高速フェリーが急速に普及しているという時代で、フェリーの横腹につける乗降ステップを手がけていた。フェリーという新しい交通手段が登場する中で、アイデア次第で大手に十分に対抗できることを、その会社が教えてくれた。

七二年末、大阪で電気制御の技術を身につけた弟とともに帰郷。翌七三年二月、実家の納屋を改造した作業場で、資本金十万円と五万円の中古車を元手に、小松産業を設立。その後の展開は、前号で紹介したとおりである。

### 家業・企業・事業の違い

「企業とは何か」を考えたとき、小松社長は仕事には三つのレベルがあるという。家業あるいは生業というのは、文字どおり

生活のために必要なことをすることだ。では、企業とは何か。企業の「企」という字は人を止めると書くように、人を立ち止まらせるために価値あるものを創造して固定客にしようとするということである。それが事業ということになると、そこには新しい価値の創造や社会の変革という意味合いが含まれてくる。単なる儲けだけではなく、世の中を良くする、それに役立つ何かをするのが事業である。

これまで多くの企業は、その活動を企てに次ぐ企てで続けてきた。そこに利己主義と競争のための競争が加わることによって、やがて社会のあちこちに歪みが生じ、人類の存続基盤を脅かす環境汚染やエネルギーの枯渇、そして食糧確保の問題が深刻化している。そうした問題を是正するのが本来の事業家の役割でなければならぬというのだ。

会社が軌道に乗ると小松社長は、企業経営者から彼のいう事業家への道を、細心に、そして大胆に進進するようになった。小松電機では九四年にHNS（人間・自然・科学）研究所を設立。研究開発のほかに、社会貢献をもう一つの大きな柱にしている。具体的には、研究所の設立と同時に「一村一志運動」を提唱。「一村一品運動」がモノで村起こしを目指したのに対して、「一村一志運動」の場合は、心、高い志を通して地域

韓国にも製造技術は無償提供し文化交流を進める



の振興を図ろうというものだ。

その具体的な見本であり成果が、郷土の偉人・周藤弥兵衛の発掘と紹介であった。

いまから三百年ほど前、江戸時代の八雲村で村を洪水の被害から守るため、五十歳半ばで志を立て、自力で四十年以上の年月をかけて岩山を切り削り、川の流れを変えて村を救ったのが周藤弥兵衛である。

その周藤弥兵衛の伝記を、HNS研究所では小説・児童文学・漫画という三部作の形で出版し、「周藤弥兵衛シンポジウム」を開催。「一村一志運動」を全国に広めようと、様々な展開を試みている。

「一村一志運動」とは別に、神在月「縁むすび全国大会」や「縁むすび世界大会」の開催を提唱、縁結びの地・出雲から、日本そして世界を変える新しい文化を情報発信しようとする。

## 太陽の国 IZUMO



物工学「技術」を応用した生命連鎖型海洋牧場やバイオ農場、マリナー・菜園付き住宅、風力発電施設などを建設。

HNS研究所から出版された文化活動の一端  
廃棄物を出さないゼロエミッションに基づき、自然循環の中で文化的な社会生活ができることを証明するテストケースとし、二十一世紀の社会システムモデルを提案する。

いうイベントを行ってきた。

これまで、経済アナリストのピーター・タスカ氏やマクロピオティックの世界的指導者・久司道夫氏、評論家の草柳大蔵氏などが参加している。

その一方では、アジアの国々との友好関係を築くために、たとえば業務提携した韓国のベンチャー企業に対してシートシャツターの製造技術の無償貸与を行い、韓国の独立記念館に日本人として初めて百万円を寄付している。

小松電機では、社員たちを交替で韓国に派遣し、韓国の独立記念館を訪問させている。飢餓に悩む北朝鮮に対しても五百万円を寄付するなど、率先して小松社長なりの民間外交を行ってきた。

## 四大プロジェクト構想

この七月、小松社長の長年の構想をまとめた地球ユートピアモデル事業「太陽の国IZUMO」がHNS研究所から出版された。

その中心テーマは、二十一世紀に向けて、日本文化の原点である出雲の地に具体的な事業の場をつくり出すための四大プロジェクト構想である。

海水と淡水が混じり合う汽水湖として知られる中海周辺に栽培漁業や農業、観光などを核に、「自然と人間が溶け合った二十一世紀の新事業」を創造する。それは同時に、世紀

### ④未来を拓く——研究・教育機関の設立

「地球ユートピアモデル事業」を具現化する「人物」の養成を行う機関。

二十一世紀を担うリーダーを輩出するため、日本国内にとどまらず、アジアをはじめ広く世界から志ある人を集め、自由闊達に自己開発のできる研究・教育機関を立ち上げる。

## 縁むすび世界大会

「古くから、縁むすびの国」といわれてきた出雲には、地政学的・歴史的に考えたとき、行き詰まった社会を希望の持てる社会に誘導する役割があるのではないかと、小松氏が「地球ユートピアモデル事業」構想に駆り立ててきた。

そして、その具体策である四大プロジェクトは、小松氏と志を同じくする者たちが考えた日本再生プランであり、いわば日本人の心と社会のリストラのための青写真である。

末の社会問題や環境問題を解決するモデル事業であり、次の四つの構想からなっている。

### ①心のインフラ整備——人縁・感謝と戦争の歴史記念館

人と人との出会いが生み出す「新しい文化と文明の創造」「戦争の悲劇」という歴史の陰と陽両面を時間軸に沿って理解できる「心のインフラ整備」としての歴史記念館を設立。それにより、日本が世界の中で、どのような役割を担い、どう行動していけばよいのかを考える「場」の創出を目指す。

### ②心の首都——松江市市街地再開発構想

近年、荒廃著しい青少年問題の解決のため、人間本来の価値観（利己から利他へ）を育む教育の場を創出することを旨とする。

「命とは何か」「人間は何のために生きるのか」を考えさせ、社会における自己の役割意識を高め「心の進化」を促すため、「心の首都」として、衰退著しい松江市寺町界隈を再開発。新しい時代を拓く「真理に立脚した心の教育の街」、「人間教育旅行（修学旅行）の街」、「人生の師との出会いの街」にする。

### ③ゼロエミッション・小規模理想郷——中海・宍道湖圏域の新構想

深刻化する環境問題、食糧問題、エネルギー問題の解決の糸口を見出すためのプロジェクト。

島根・鳥取両県境の中海・宍道湖圏域に、先駆的「インテリジェントバイオ（情報微生物）」の創出。その目指すべき理想郷は「天寿が全うでき楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造」である。

大言壮語としか思えないような構想を口に、既存の経営者らしからぬ夢のような話を語っては周囲を煙に巻いてきた小松氏だけに、青臭い、変わっている、そう思われても仕方があるまい。

しかし世紀末の現代を憂い、人類の未来、地球の将来に思いを馳せる人々は、出雲だけではない。日本の各地で似たような試みが展開されているという事実もある。

「太陽の国IZUMO」が出版され、この十月二十日には松江で「縁むすび世界大会」が開催され、いよいよこの四大プロジェクト構想が本格的な旗上げのときを迎える。

（次号は群馬県高崎市の「ベーシックエンジンアライニング」編になります）

（ジャーナリスト・早川和宏）